

中等教育研究開発室年報 第32号 (2019年3月31日発行) 別冊電子版
2018年度 授業実践事例

英語科 中学校第2学年

「自分のことば」を深める

授業者 山岡 大基

(教育研究大会 公開授業)

広島大学附属中・高等学校

中学校 外国語科(英語) 学習指導案

指導者 山岡 大基

日時 平成30年10月13日(土) 第1限 9:30~10:20

場所 第1研修室

学年・組 中学校2年A組40人(男子19人 女子21人)

単元 自分について表現する

LESSON 7 Presentation

NEW CROWN English Series 2 (三省堂)

- 目標**
1. 聞き手の理解しやすさに配慮して話す。(学びに向かう力, 人間性等)
 2. 適切な表現を用いて数値や概念の関係について表現する。(知識及び技能)
 3. 自分のことについて話の流れに注意しながら話す。(思考力, 判断力, 表現力等)

指導計画 (全7時間)

第一次	教科書本文の内容・言語材料の理解	3時間
第二次	数値や概念の関係を説明する練習	1時間
第三次	自分のことについて, まとまりのある文章で話す練習	3時間 (本時 6/7)

授業について

授業構成は基本的に「オムニバス型」を採用している。外国語科の特質上, 毎回の授業で1つずつ目標を達成していくよりも, 単元あるいは複数単元というやや長い期間で複数の目標を同時並行で達成していく方が現実的と考えるからである。本年度は, 毎回の授業冒頭スピーキング活動を帯活動として設定し, 継続的にスピーキング技能の育成を図っている。

スピーキングについては, 次期学習指導要領では「話すこと [やりとり]」と「話すこと [発表]」に分けられているが, 指導においては「発表」を優先させている。短く定型的な言葉を交わすだけの場合を除き, 「やりとり」も個々の発言者の「発表」の連続であり, 各自がターンを十分に維持できなければ, コミュニケーションが成立しないからである。本単元でも, 活動自体に「やりとり」の要素が含まれるにしても, 指導の意図としては「発表」に重きを置いている。

帯活動1は, 語彙習得を主目的とした活動である。英日対照での語義暗記にとどまらず, 語句を自分なりの文脈に位置づけて使ってみることで, 知識を個人化することを試みている。また, 本時で学習した範囲の語句を使用することを目標にした会話も行い, 「話すこと [やりとり]」の要素も加えている。

帯活動2は prepared speech の活動であり, 学習班の中で輪番制の発表者が一定時間継続して話す練習である。活動に必然性を持たせるために Q&A のセッションも設けているが, 主目的はモノローグを構成する力の育成である。

本時活動は, 帯活動2からの発展で, 各生徒が準備してきたスピーチを発表しあい, 生徒の相互評価と授業者によるモニタリングを経て, 各自の発表を改善する。

中学2年生という段階でもあり, またスピーキング技能の特性からしても, 生徒のプロダクト自体は完成度が決して高いものではないが, その未完成的な生徒の言葉を, 少しでも前進・向上させて, 生徒が自分なりの英語を使うことができるように導く授業としたい。

題 目 「自分のことば」を深める

本時の目標

1. 聞き手の理解しやすさに配慮して、音声や使用する表現を修正する。
(学びに向かう力、人間性等)
2. 自分のことについて、情報のまとまりや関連性を明確にして話す。
(思考力、判断力、表現力等)

本時の評価規準（観点／方法）

1. 聞き手の理解しやすさに配慮して音声や使用する表現を修正している。
(学びに向かう力、人間性等／観察)
2. 自分のことについて、情報のまとまりや関連性を明確にして話すことができる。
(思考力、判断力、表現力等／パフォーマンス・テスト)

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
帯活動 1 語彙学習	<ul style="list-style-type: none"> ・『中学版システム英単語』を用いて、語句の発音・意味を確認する。 ・使用語句を自由に選択して口頭で自由英作文をする。 ・指定された語句を使用してペアで会話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・正確な知識を伝える。 ・できるだけ自分なりにアレンジした英文を作るよう促す。 ・活動をモニターして、必要な補助を行う。
帯活動 2 スピーチ	<ul style="list-style-type: none"> ・学習班に分かれ、担当生徒がスピーチを行う。 ・班内でQ&Aを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動をモニターして、必要な補助を行う。
本時活動 スピーチの修正	<ul style="list-style-type: none"> ・各自が用意してきたスピーチを班内で発表、相互評価をする。 ・スクリプト（ワークシート）を机上に置き、他班のスピーチ・スクリプトを読みに行く。 ・授業者からの指導を受けて、各自のスクリプトや発表を修正する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動をモニターして、できるだけ個別的・具体的な助言を与える。
備考		

外国語科(英語)学習指導案

授業者 山岡 大基

- 1 日 時 2018年10月13日(土) 第1限
- 2 学年・組 中学2年 A組(40名)
- 3 単元(題材)名 Lesson 7 Presentation (New Crown English Series 2 三省堂)
- 4 単元(題材)について

(1) 単元(題材)観 本単元はプレゼンテーションのスキルを育てることをねらいとしている。教科書では、生徒が自分なりにテーマを設定し、クラスメートにインタビューした結果をまとめて報告する、という流れになっており、これはそのまま教室での言語活動に応用することを想定したものとと思われる。プレゼンテーションのスキルに関しては、Opening-Body-Closing という3部構成とともに、transition を示すディスコース・マーカーや、図表・数値を説明する表現が導入されている。新学習指導要領との関連では、「話すこと[発表]」のうち、「イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。」という目標と関わりが深い。

(2) 生徒観 学習に対する動機はおおむね高く、授業中の学習規律にも大きな問題はない。しかし、精神面での成長とともに、テスト(評価)を目標とするだけでは学習動機が維持できず、家庭学習が質量ともにおろそかになりがち傾向も見られる。小学校での外国語活動を受けて、英語に対する慣れは見られるが、教科学習という面での慣れであって、自分の「第2の言葉」として英語を使う感覚は、まだ育っていないように感じられる。

(3) 指導観 言語活動としてプレゼンテーションを行うが、内容は、教科書のような調査に基づくデータの説明ではなく、生徒自身のことを話させる。また、3部構成全体の完成度も、本単元としては高いレベルを要求しない。これは、まとまりのある文章で発表すること自体に生徒が慣れていないため、負担を過重にしないためである。本単元では特に Opening に焦点を当て、聞き手がプレゼンテーションの内容を円滑に理解できるよう、話す内容や話し方を工夫させる。その過程では、「自分のことについて他者にプレゼンテーションをして理解してもらう」という目的を意識させ、学習班における相互フィードバックを取り入れつつ、「自分のことば」をどのように改善すればよいかを考えさせる。

5 単元の目標

- (1) 聞き手の理解しやすさに配慮して話す。(思考力、判断力、表現力等)
- (2) 適切な表現を用いて数値や概念の関係について表現する。(知識及び技能)
- (3) 自分のことについて話の流れに注意しながら話す。(思考力、判断力、表現力等)

6 単元(題材)の評価規準

- (1) 聞き手の理解しやすさに配慮して話している。(思考力、判断力、表現力等)
- (2) 適切な表現を用いて数値や概念の関係について表現することができる。(知識及び技能)
- (3) 自分のことについて話の流れに注意しながら話すことができる。(思考力、判断力、表現力等)

7 指導計画(全7時間)

次	主な学習活動	主な指導	評価の観点 と評価規準
第1次	帯活動:即興英作文 第1時:教科書本文の内容理解 第2時:言語材料の理解	・口頭英作文(1文) ・語句の意味・発音,音読,英文和訳 ・講義,英文和訳	
第2次	帯活動:即興英作文 第1時:数値・図表・概念の関係を表す 表現の理解,プレゼン原稿作成 第2時:プレゼン原稿作成	・口頭英作文(1文・4文連作) ・講義,音読 ・グループワーク ・個人指導	知・技
第3次	帯活動:即興英作文 第1~3時:プレゼン仮発表,プレゼン原 稿の書き直し	・口頭英作文(1文・4文連作) ・ピア・フィードバック ・個人指導	思・判・表

生徒の産出英文の例

<p>Hello, everyone. I'm going to talk about things in my bag. There are a lot of things in my bag, but I will tell you about three of them. The three things take most of the space in my bag.</p> <p>First, books. Of course, I have to bring my textbooks. We use many textbooks at school. They take about thirty percent of the space in my bag.</p> <p>Second, the lunch box. I eat a boxed lunch every day. I get very hungry, so my lunch box is very big. It takes about twenty percent of the space in my bag.</p> <p>Thirty plus twenty is fifty. What about the other fifty percent of the space in my bag? What is there? Well, it is my badminton goods. I am in the badminton club, and I practice it every day. I need many things for that. For example, I need my uniform, towels, and supporters. They take a lot of space in my bag.</p> <p>So, my bag is filled with these three Bs, books, a lunch box, and badminton goods.</p>

8 本時の展開(第6時)

(1) 本時のねらい

事前に用意したプレゼンテーションを仮発表し、生徒同士のピア・フィードバックや授業者からの個人指導を踏まえて、より、聞き手に配慮した発表ができるように、音声面も含めて原稿を書きなおす。

(2) 準備物

教科書、『中学版システム英単語』、『基礎英語2 10月号』，“GRAPHME” ワークシート

(3) 本時の展開

時間	学習活動	生徒の活動	指導上の留意点	評価の観点と評価規準
0	即興英作文1	・『中学版システム英単語』を用いた口頭英作文(個人)	・安易な模倣を避け、できるだけ工夫するよう促す。	
8	即興英作文2	・『基礎英語2』を用いた口頭英作文(グループ)	・工夫が見られたグループは全体に紹介する。	
13	スピーチ練習1	・各班担当生徒によるスピーチ。	・話す速さや声の抑揚を工夫するよう促す。 ・聞き手は改善すべき点を見出すよう促す。 ・授業者は活動をモニターする。	知・技 思・判・表
16	ピア・フィードバック	・各班で聞き手から話し手へのフィードバック。 ・話し手はフィードバックを踏まえた改稿。	・特に Opening の内容・表現・話し方に焦点を当てるよう促す。 ・可能であれば、 Body, Closing についても、前時までの学習を活かすように促す。 ・授業者は活動をモニターし、必要に応じて個人指導を行う。	知・技 思・判・表
35	スピーチ練習2	・各班担当生徒による改稿後のスピーチ。	・各班で、フィードバックが反映されているか確認させる。	知・技 思・判・表
40	スピーチ発表	・各班担当生徒による、他班に出向いてのスピーチ。	・スピーチ発表後、聞き手から話し手に肯定的な感想を伝えるよう促す。	知・技 思・判・表
45	デモンストレーション	・代表生徒(1～2名)による、クラス全体でのスピーチ。	・授業者は、話し手に肯定的フィードバックを与えつつ、できるだけ、さらに改善できる点を伝える。	
49	振り返り	・本時の学習のまとめ。	・生徒個々で、本時で学んだこと、次の自分の発表に活かせることを書き残させる。	態度 知・技 思・判・表

(4) 板書計画

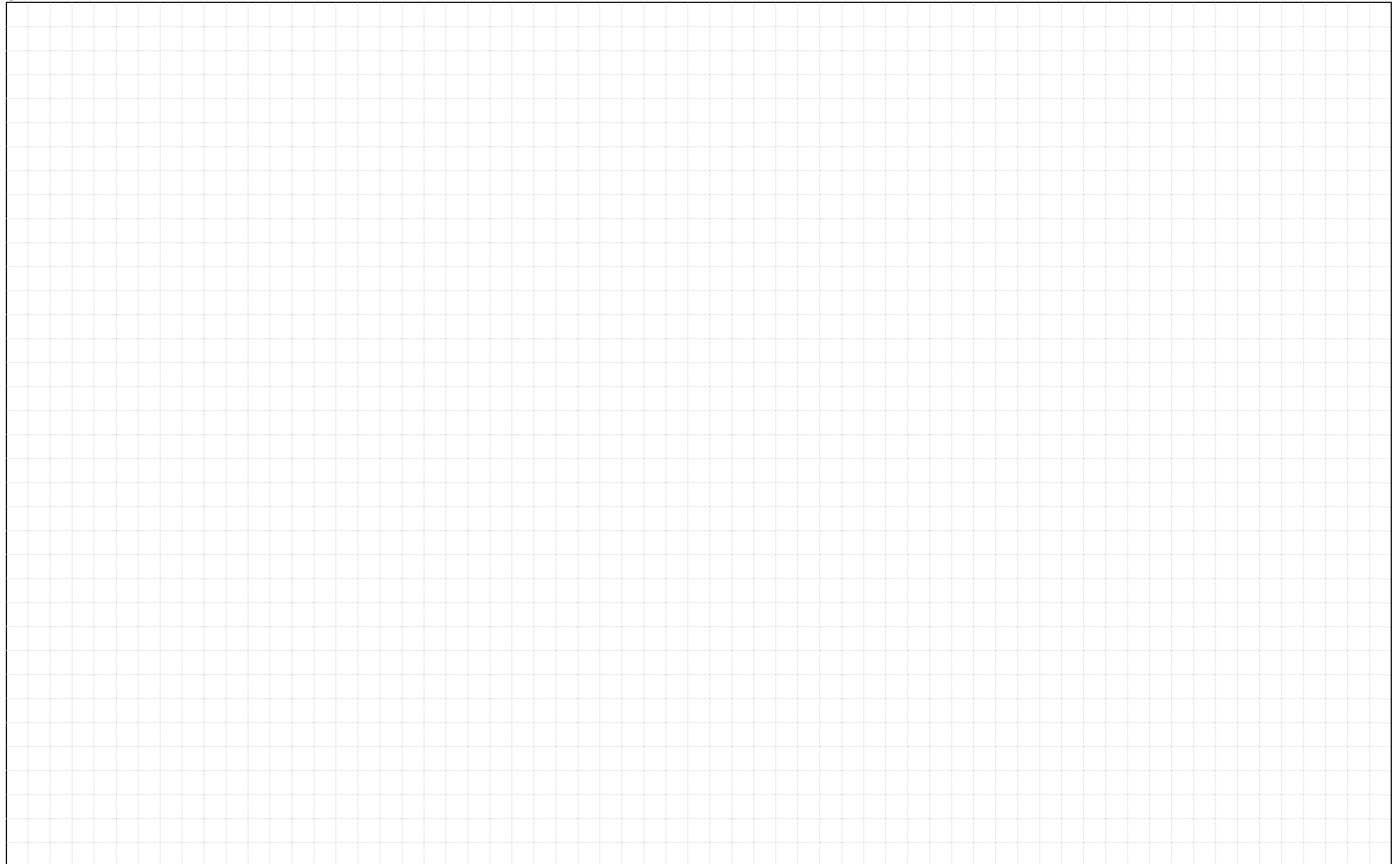
stressing 強
stretching 伸
pausing 止
repeating 復

生徒へのフィードバック等
適宜使用

And _____
But _____
So _____

GRAPHME

Graph / Chart



1st Draft

2nd Draft

Opening		Opening	

Body		Body	

Closing		Closing	

Year 2 Class Number Name _____

Example

Opening

I am going to talk about happiness in my life, or what makes me happy. What makes you happy? In my case, there are three things that make me happy. What are they? They are 3 Cs.

Body

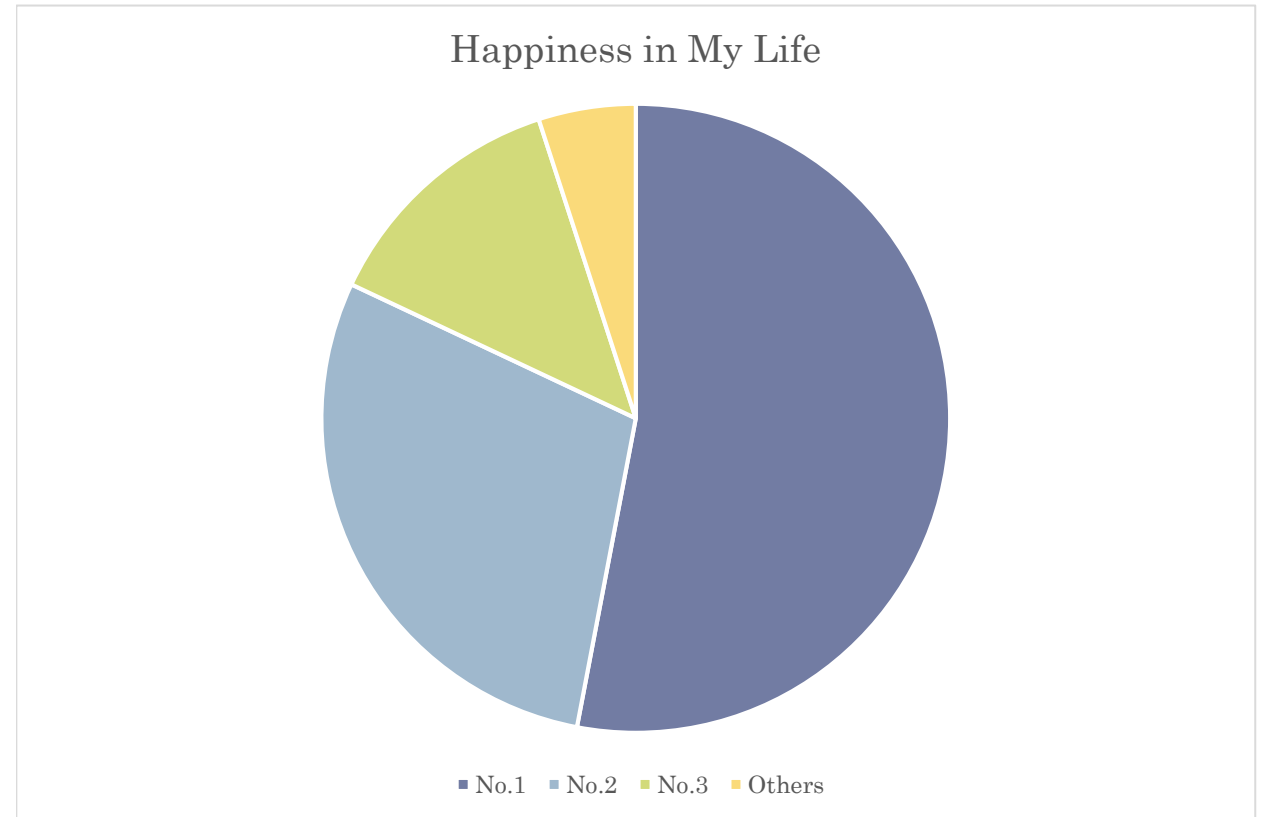
Let's begin with number 3. It is "coffee." I like drinking coffee. I am very busy these days and I do my work at home late at night. When I work at home, I often drink coffee. It is hard to work for a long time, but I can feel happy when I drink a cup of coffee.

And, number 2. It is my "children." I have two little children, and they are cute. I love them. I am happy when I am with them.

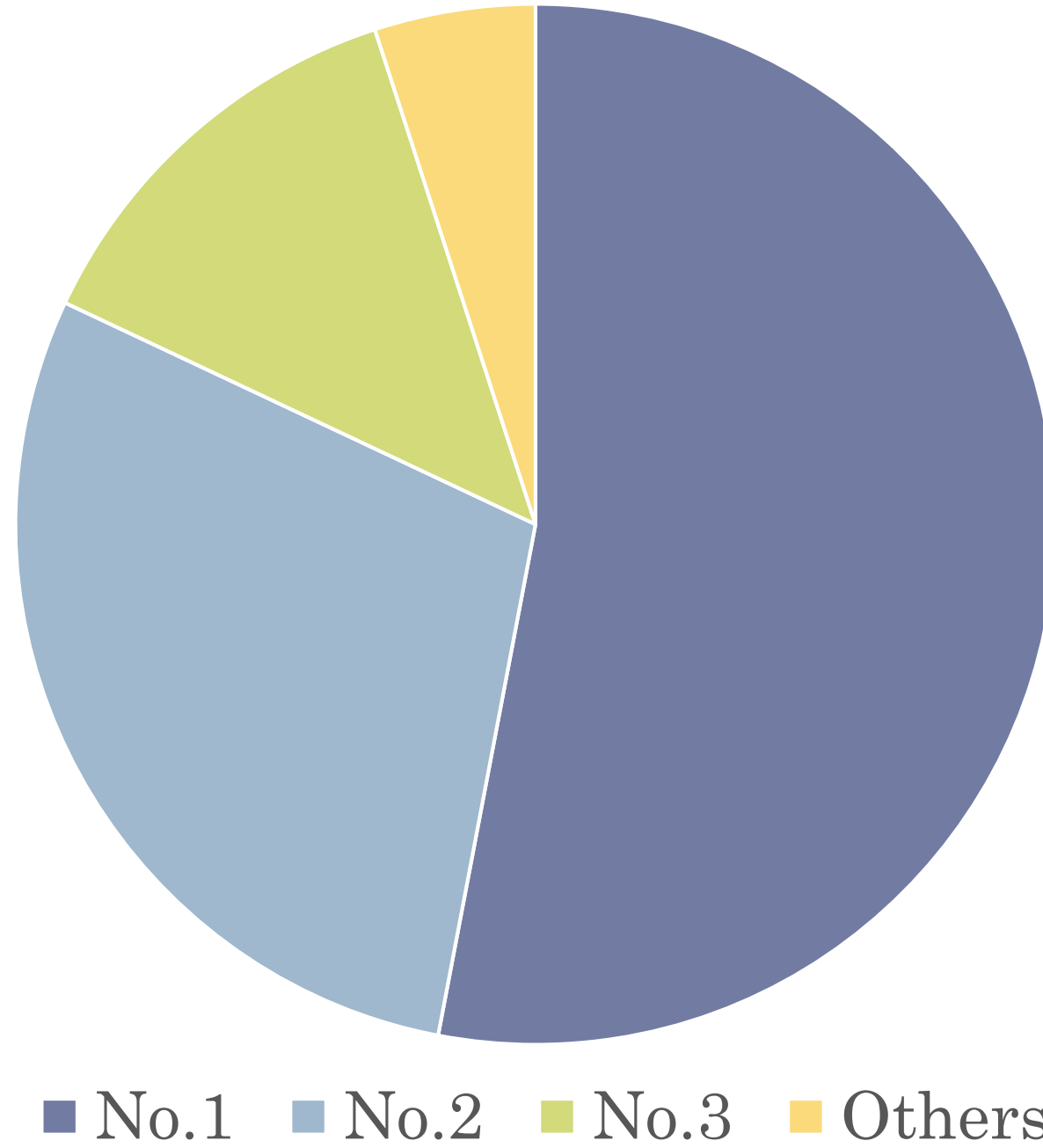
Then, finally, what is number 1? Can you guess? It is a kind of food. OK. It is "chicken"! I especially like fried chicken. I can eat it every day! Chicken curry, chicken burger, chicken sandwich, chicken salad.... I am happiest when I eat chicken!

Closing

So, do you remember the three Cs that make me happy? Yes, coffee, children, and chicken! Thank you!



Happiness in My Life



実践上の留意点

本授業の背景として、日頃から重視していることは、生徒が英語を「自分のことば」として使うことである。「教材の英語」を再生したり暗記したりする学習は語学の訓練として必要だが、そこで終わることなく、自分の思いや考え、創造性などを表すために英語を使う場面を授業の中に作ることを心がけている。技能面では、この授業ではスピーキング力を伸ばすことを意図しているが、「教材の英語から自分のことばへ」という方針は、他の技能を扱う際も変わらない。たとえば、詩や物語の創作といった大きい活動だけでなく、語彙学習の際に、オリジナルの例文を生徒各自が作ってみるといった、日常の小さな活動を通じて、常に、「自己表現」に限らず、借り物ではない言葉として英語を使う機会を作っている。

スピーキング指導という観点からは、指導の段階性・体系性を意識している。スピーチや会話のように、ある程度まとまった分量を話すのが本来のスピーキング活動であろうが、指導上は、語句のレベルで話すことも、スピーキング指導に位置づけている。そして、語句から1文へ、1文から複数文へ、複数文から文章へ、と段階を追って、また複数のレベルを組み合わせながら、スピーキング活動を作っている。

話す内容についても、既存の英文を再生する機械的訓練の段階から、強い制限をかけつつ部分的に自由度のある発話、制限の弱い発話、そして、完全に自分で内容を考えて話す発話へと、いくつかの段階性を持って指導している。

このような方針は、本授業においては次のように具現化されている。

- ・『システム英単語』の語句を使用しての創作口頭英作文・・・個人で1文を作る活動
- ・『基礎英語』の文を使用しての And-But-So 口頭英作文・・・グループで複数文を作る活動
- ・Graphme スピーチ（図表を用いた説明）・・・グループで文章を作る活動

生徒に「自分のことば」として英語を使わせる場合、課題となるのが、生徒の不十分なパフォーマンスである。不十分なパフォーマンスも「中間言語」として認めるのか、介入してパフォーマンスの改善を図るのか、の判断に迫られる。どちらが良いということではなく、個々の生徒、個々の場面に応じて対応すべきであろうが、その見極めが難しい。

この点について、本時では次のように対応している。まず、『システム英単語』と『基礎英語』を使用した活動は帯活動であり、基礎的な知識・技能を拡充・整理することも、目的の一部である。そのため、これらの活動で不十分なパフォーマンスが見られた際は、すべてに対応するのは不可能であるが、積極的に教員が介入して、即座に修正することを心がけている。

一方、Graphme スピーチは、生徒の思考力・判断力・表現力に重きを置く活動であるので、教員による即座の介入はしていない。その代り、グループ活動でのピア・フィードバックという形で、まず生徒同士で考え、話し合わせ、自分たちだけでパフォーマンスの改善を図らせている。その後、修正されたパフォーマンスに対し、それでもまだ改善すべき点を教員が見取り、介入する、といった段階を踏んだ。

このことは、「深い学び」の実現と密接に連動している。すなわち、まず生徒は、既習範囲の知識・理解に基づいて思考したり他者と相互作用したりしながら、さまざまな知識・技能を構造化・再構成して個別の学習課題をクリアしようとする。この部分では、生徒自身の取り組みを重視する。一方、生徒の力の限界を超えて、さらなる精緻化を図る際には、専門家たる教員が介入する、という区別である。

このとき、教員に求められるのは、適確な見取りである。ピア・フィードバックの際の生徒のやり取りを観察し、生徒自身での修正がまだ可能か、限界に近づいているかの見極めが必要である。また、最終的に教員が介入する局面でも、個別の生徒の習熟度等を考慮して、どこまでの修正を要求するかを判断しなければならない。その意味で、見た目は生徒主体の活動で進む授業であるが、実際には、教員によるコントロールがたいへん重要である。